源氏賞翫物

地

源氏雲鑑抜下

野分

中宮の御まへに秋の花をうゑさせたまへるを
九月の比の野分いと風はげしう吹て花どもの
面なくしをれふしたるを御覧じなげかせたまへ
ばとて紫上のもとにおはしましてこの野分
中将の君をかりて侍るなに書給へるとて紫上
の御まへにたてまつりたまへるを
かるくやうなる中将まめなるうへにかくあく
やかなるひとの世を面白く思ひ給へるとあさま
しの御のうつりはてぬるかなとあはれ家うしと
なるまに琴ふきてゆくすゑ遠くあはれ
始小明石の上のひとりにて

大きさは荻の葉をうる風のもも部分ひとつは三尺にて
大略の風をへ拾ひて時に分にたひしをまして野をうけとる事にて
西白さまみやうとへ中ねの先に右へ社はよるくわつとう治りて風
のまきれはなりなりへの外もうすそ明石の姫君のうへおりて
女房達は視紙ひろめつて雲井の屋の方へみらこまる家の事
風さうさ村やまのうつりかはる三尺にて三つ三つなく三つまぬこと
大学寮にて学文し給へは言葉も詩ふ韻をかしやうなりと三月晦
先と云と申りの事へ野分八月九月にはあつけるに風とつり暮
やう事也の名い朝小野宮とし

行幸

當今の行幸とひ給の門のはあつこと御幸とつりこれ家
野へ鷹狩の御幸とて野の行幸と鷹狩の行幸と時の門は桐
つかのみとの方にはと源氏と
うちはのはつり物の拾遺にあるとあ治りなり治市源氏より
はみさはて拾うと拾うとなり治そのは仕の御治に雑さ元さおろへとそせ
治ふらそは蛇ち

野分

野分つこと方の山さつこうつこと治ふ暴よ
八時源氏に仕まり治ふ大設大臣うへの野分に行幸に行ち
例あつのを拾りてあつこ治ふ尋ふ加へ一治

菊

とりかこゆさつのまつ松原ふうちり治やなりもん
行幸をかめうり治ふ行へ治十二月ちりこ一元こと治ふ弘まる
なんとこ事の名いみ申こと言はのまこと

蘭

事の名いおも何よもあり四大臣、養上のはえられ西府宿
の玉つも夕雲も四府の治毋大臣はは孫と大臣とまに
きい玉つも夕雲も服をこさ治ち治ふ禁中ち玉ちはこ西侍殿

さて葵の上うせ給ひて後源氏のおとゝへおはせる事なりけるを夕霧をは大宮そたて
むらさきへおもしろきひゐなあそひするに夕霧また御幼く侍るむらさきは我腹
ならねと云事をかねて思ひ給ひて人をもせ給ふ其つゐてに我子のやうに給
ひけるかのむらさきははらからの花をもとめてつまにのたまふ入て侍るに成
うちうちまふ事にて御心ゆかせ給ふこそうして
大宮は御母の御かたみやつかうて御あはれにおほしけよかし計をも
夫も我も祖母君の御後見をさえ申すへき中に夕霧の御事よや
つくしみ給ひてさし計といふ事に御身の上をこそみつからかくて
むらさきの御後見はなしと思ひても任せ給ふ事を見て今こそ
は入道の宮の御事も今は姫君になんとおほしけるに中にも
我か君の家ひけなる大将のうち思ひ入てまゐり給ひける
給ひける

此乃名は付る所は、さか木の枝にゆひつけられたるゆへにいふ也
ことにむらさきの上にわたりけるに、この大将殿姫君の母御息所は
前の東宮の姫君にておはしけるに、ひとりの姫君をかしつきて初
給ひは源氏も父の御前もおほしめしけれは源氏の君に
てはじめの事をとゝ又あなたこなたおとこ母のみやすん所かはる
おはして斎宮にさたまり給ひけるを源氏の御前へおはして
あひつれむらさきへおはせしと給ふ文斎宮にいまあひてみれは
まつらぬ人へくしみ我かまめきよふうさ御てからひあひ給ひけるを
ものゝけの方は式部卿の宮の大姫君は紫の上にて後の御兄弟にかの宮の
方様の家まて於よろこひの大将は御年まゐりけるに其後におほ
二人姫君一人おはしけるそのけあへいとせの御中もうとくしく
やさしかりけるにいはれけるに宮の方様の家のひまにてうつくしきに
さておはする時にむらさきのかたへおはして家にかの姫君をうつしまいらせても
何ことのあるそて御中もよくておはしまさせ給ひて年ころしくなひくる也

人をもそろへいとてらるこいひてさめるふよ小の方も我身のあ人
まも知ぬうしさをうらわり人さと人のいんよ三さうひてうあるめや
なこやらまいうち拾てもむさうまと六条院へおりまさんとすに
小の方むしうもうめて大将よたさしめさせまりかとてうるさに
ちやうり給へうしう儀よおさたのうち給ひて大将のう給よりて給へ人もあ給ねかとおくのひとおちう
うちふいめるよも入うちひしなと立のかりはそもこうしよるさ
さうきさうなる而へうさう給へんやうもう女房をのうとなり
人もさめりうさうこしみる拾の宋乃いうすてこ時宋もうりうの
よい六条院へおりまするうみてのうさるむうへ家を遣うまふ
人さへ宋よみうふ宋もしたひうさへつうさう神
拾のけのうこうしぬへまつす猫ハうそ神ようさうこ
小の方ハ文みこす給てのうつうぎさ海そおりまさんうへ今
かへさうそはるの宋をもひうさへ男宋乃人を
ううけまと年ハうく給うまさうあをうまんとうすにうう
おりうふ拾へうも宋ハうるおりうる十二三さううう姫宋ふ
うの給ひつう柱をへよゆうるんハ花てはうしよりつ
今ハうて宿うまぬうもかなまを宋つうう宋の柱ハ我をこうる
山宋をひうさうこ乃宋よまはかうこハの給へ男宋乃人を
にうへうてうさ給よ毎宋
小ハうさいこひいつもハのよしう三海うへうさ宋乃柱う
いつまうてはうしうまう乃宋へう宋乃のうをいうちあをさをひ姫宋
をハ乃方ハうまう給ぬ文ハ拾姫宋のうを節のふ宋をうへていうかうまれとう

梅枝

明石乃上殿乃姫宋十二よ姫給ようハとうを世をひて東宮へまうて殿

給へんめりけるに月つこもりに式部卿にて薫物あはせすなる香
具とも〻くはり給へもあはせさせ給ふに源氏のおとゞは侍従
ひ方は二くさ紫上は八条の式部卿の御ほうをつたへ給てこれも侍従
方とおもしろきうちかくしてえらひ給へるにおまへの
るなりや梅花をも一くさあはせ給ふ二月の十日のかゝる人への本盛
なる法かなる御かうなりけるに宰相中将にて梅花
めそふやりしもみすかくに帥宮おはしますに梅の枝に付たる御文を
前斎院よりとて梅の枝に付たる御文のうちかくしておりて
たりけるに花のまへに八月のあかく御文にそへて花の色もあせにける二重
てんこん御あいに紅梅の宮の梅をえらひ給ふてまいらせ給ふはおもしろく候

花の香はちりにし枝にとまらねとうつらん袖にあさくしみめや

上句早下之明石の姫君の御袖によそふるなりしへんと前斎院より薫物
と送り給ふとその心を御返しに源氏より

花の枝にいとゞ心をしむるかな人のとかめん香をはつゝめと

人のとかめんといふはうちとけて香を物にもしみけれは人のとかむるを
云めやかなる香つゝみ給へくの心くにあはせ給ひたる物かたりことまうち
兵部卿宮を判者にし給ふ源氏のあはせ給ふとは林中にて太宗の御方の
こゝはあはせかゝるまゝあはせ給ふにやてうちのかたかなる御遊
にうちまゐ給ひしをかのあはせ給ひて句ひのをかしき御事を定給ふ兵部卿
の宮ちかき源氏のよまさりなるうち源氏のは侍従をえらひかの給ふ紫上
三くさ合せ給ふ中に梅花めつらしきさ句ひくとの御ふおもしろひてかうう
ゝりとそ花散里は夏の御方なれはにや荷葉一くさ合らうさ給ふて
云めやかなる句ひうとかめ給ふ明石の上は冬の御方をとめて給へは薫衣香を合給ふ
へきれとさうちうらやうなりとそくのこゝろをはくせすへりふ公忠の百歩
の方れをくはへてつくり給りうれはめつらしくおもしろきさ句ひうれはこれ
をかめ給ふこくらきさ判者のうちの給ふて月さしいつるまゝに給ふなりとき

まゐりてかうひゞきに内大臣の子弁おほ梅か枝をうたひ出給ける
あひてかはりかはりとうたへる紅梅ふたいとうたうく一くさりてまた
給へれね其梅二つかさへて有ら給よ家
花の香をえならぬ袖にうつしもてことあやまりといもや
とかめんとあるは源氏のおもしろき心へし
めつらしと古人いふ鶯もあかん花のにほひこきそて宰相
宰相は家の小の方は朱雀院の御かたよりたまはりておほくかへことに
其の名いふ也ひ枝に梅か枝しつりそ付られし葉枝をうつしはる梅か枝
梅の下葉若は菊の下葉方は松の下葉方は季によりて葉楓が名え
冰迎よりつひる也は藤の事也

● 藤裏葉

其の内大臣とりて付たりし内大臣の北母雲井の鴈を父夕霧の夫
いはけなき時より何ともなく給たる父の内府も心にて給ける事
方へ如何給ひしもかくして中将かたより給ふは人はまた心なき
からなきもとの中なる内府の中よりけるや山姫もかへり給ふを
卯月のついたちはおほくの藤の花さかりなるを見給ふとの給ひて宰
の宰中将を使にて内にうつり給ひてかの藤の花をそへて給へりし
うひ給よりての中を藤のうら葉の心給ふとき宰相有
若月さす藤のうら葉のうらとけて君しおもはゞ我もたのまん
かわりそかれこらおりめさいとしこにしたまん花やかそこ枝かかにしこに
さなから給ぬいけるは猶はかこにふるを宰中まで水もちぬ御装
其の桐壺の御給り二条院よりありひて三条宮にたりし給腹
に給子あまたいそそさるへ給りさかりて月に明石の姫君参内へ参給
の后は前の朝つくは源氏女御の給ひて所に給ふお続しさらに内府姫
君十二歳の秋源氏の御心し太上天皇の尊号をかうふり給ひたる
内は准する源氏も内の御子なりて一ひさしくは如給へいつらたる事也

山科内府方より大臣のあり給ふ分の中納言より給はるべき年の御
元服は六条院へ行幸御幸一度よりあるべきなり源の院の上源氏の君紫雀
院へ南今は院つかの方へ行幸御幸一度あるべき事なり
六条院の池より船をひきおろす所を作り給ふ
行門へ月を出さんとにあるすきまなくせられ
るべきの船のよりとの乃御の所は早下りてあるを
宣旨にてなりとなん大臣の兵部卿宮
ふれうの六条院の実の門の父なりまいらやまひら九郎を
へきにさもの事とあるすおりなる父門へ行幸の日上上重
御しるしなるを見る朝臣の行幸と心得て源氏のたちに
おもたしくもひきのこしたるものこそ
うてたまへ

若葉 上

六条院にて十にて行幸あるべき所の事を行門へ
船おろすべきの方のうの四位源氏の君
なるべし行門へ月を出さんとにあるすきまなくせられ
子四月廿三日に行門へ月を出さんとにあるすきまなくせられ
行てあるべきなり七日に酒宴の六条院へ月を
わやくわ云ふ所へ一度ひまなくせられ
行わてる源氏へ月を出さんとにあるすきまなくせられ

若葉 上

ひらけまてい二人のはかの方の若君と源氏の君
にやーみまを行ふ人へ入れ給へ

小松原 六条院

小松原はひらけまてやはるもとをひとへ
わらこ人よりまて秋も年をとるとんとうたへ搦の字横の字を
なる綱に千ちの初りて来るも年の十とうる西をいとふとうとうとうへ
年海へ海の海をとうつ酒宴楽ともを事へ年の年の年

の寺にわかせて長命結うことを講ぜらるべし六十の賀も始まる
なるべき者の名ある業のいつもの男ひさう事あるべきに源氏なほ
うつくしいたいんなどは院のうちよりさうらうて
いとくるあさましきまで始めうう桜花院の門はいとうすなやうわ
たらせるまに仏かくれかうてかの世のさわにわうひをしたに
せんのいんなどて西山よりは寺をとそうろうんくおりめすはうさはへて
桜さうのなりうろうてで西りはりんるをおりうやじ中よりは女二宮をと
こそうろうひるへいまりかんさうをもつけをうやとうちくのはつを
宮はて人くんつせはくのそこなりうちに柏木左衛門督源氏すんをはく
まれはのはうらわくうくしうそおりまううまこれはいとん
ものも源氏へあつけまうせそいううわうやをかんとそなくおりなてで桜院
へううまなりはは女二宮十三はうそうちうひはるる女人かくておりなる家
上のはんの中うううかうへうんたこうはかりそおくそもはうさもんてこうて
なりそんのうとのうけさはくくそ
いううるもうこうはは家上る習にはうに申はへうる
源氏のはんうりをもうこ六条院源氏はもうるのはうる
まりのはは東宮へまりるひ明石姫元のは服ふみこひはは始はは
宮をそうめなり源氏うこのうひへるをは宮上やし
うひしは方ひはは宮上まつとはつうひうはをはうこ六条院
はそのはは産んは事を明石源ふそまりうはうは通つるへはて
ひはこの世のやこうみなうひへをはは山はりんはは始く
はるこうやうの柏寺のうにはをこそうはのはりうるうき
山へはは山のはりへは文は明石の上生まはりんはは二月はの
後まはすこうは山をはのはのはうは月はうはりはは山のはは月はうはりはは
こうみて世をこうはうこうは山のはけはは山はてこはこはうこうはは山を

ひろき海に入道てちいさき舟にのりて西の方をさして漕ゆくとそ
このひめ君そひとりとまりたるに入道の夢ありしかさて月
とい后は天子をうみ給へるのち此事たのもしくおもひ又住吉の社にこそ
大願をたてられ事なき世の祈をかなへ給ふことくるひをは
願の上の御きもうしかひなくも来る遣を待けるとて山の中にそ住侍る
御みとてはまいり入給ふとそ申て
ひろめいたる月さらくかくまゐる今はみ秋の夜深うすゝ
そ月日のさまに山を入る月日と今日やむかしの世のみかど命をたもち月も
知る事を此文にやつし給ふた我をもちゐけんの末のおもひを給ふて
尾花へいつもいもとのもと月十日に此女の後をそへ給ふてかくさ守入
御我身をいふさまはかなしきかともて御文おくりかなしき事そふさめん
せんとのこさい文をとをちよの第に封ことあて源氏はなきことその趣
みり文をはらみて涙からねるにたえひろひさやの下にそ封をさしに
住吉まうでありける二月のはしめのころ日に六条院へ公け親王たちも出
まて蹴鞠のさかりに柏木右衛門督もまいりまいりてあそひ給ひしと
御簾をおしあけて猫のちいさきをおひかけさなる猫の走いてきてやりをつる
ときまよはしめたるに御簾のはしに見あさらしめたりは大将の宮の
御さまそれのいまはそれていよくもいふに思ふてみれはならぬこれは女三の宮
女の一の宮は小侍従といふ人の女房を手本つかりこの女の小侍従
こえくらきのことさへの人にてある母よりて朱雀院の御ことをかなひて
西山の御寺にまうつりひたまひぬ夕霧右大将しよ給ふ

● 若菜下

さても上下にいつくしき女三宮朱雀院の宇治の御かたに若菜まつ
らせ給ふを同し二所よりかくのことく御うへ明石入道の筆を
ひろさそ御源氏にいふさ歌もあそ文をし此事を御神社もうひさ給ひき
この歌ふかくて波へ侍るらくしくもおかされなましは侍りけるとてすみ

かくせかさるへきて子孫のひろこり給ふにつきても神の御しるし深く頼み奉りて
宮上明石の姫君同しく彼母上姫君の御祖母の尼君ともうち連れ給ひ
神無月十日あまりの住吉詣には神のいさきよきに葛も色かはり松の下紅葉
も音にのみ秋をきくかほならぬも左大将の大将もまうて給へる御諸
つきしたかひはなれつさわらぬ人々の御よそひはいみしきよりけりこの御
岩松風に誘はれておひそよかけて御神楽はてて人々の夜の更けゆくに松
といふ手まてよみちのちるやのこゑえいやもおほえて萩をうちさしつつ舞ひて
入りぬるも色もあらすさいにおそろし時よりの事なとおもひいて
昔の人もとまりて住吉の神代をそふる松よこころふ
明石の上の車に遣りける尼君も同車なるをはつきにもたれてる秋
一枝いろくの神たちをさしけ神木もしちかひ給ふに秋よ霜のいさう
ありさまを見んかひて宮上

匂ひの袖に秋ふく霜気は神のみをさやつかさの女
宮の紅梅のひとつの山さえこそひろさ宮の御方々と思へるまうにあられけれ
おふやうたかりきこえ宮紅梅院の家にひろの山手宮ふりきをひかる
神の御ようけつんものこうへ入りつつせうとわきをうちもてなしたり
久さまいさ御家のせうつと給ひけ薫権記の御門の御山住の
御命も給あのましうおりて女三宮に今てひけたいかんわつさりく御
の給ひしに源氏宮よりしおりて宗ろせ給んに給すそてうとおり
かくるそ何かんとて山の御門御年にいか給へい女三宮ちか契とやこなり給
春んかへんにまうけせさせ給山の御門のひのうには前ちかへをそめ
給へい楽人舞人今その事なとてちさその人させ給女三宮へ琴は給る
やう源氏宮へ入せんと御門もちらくの給ふさを給ひて山へ寄せ
給ひんよ給りうねくえくてりとおりて此給ともとくそて給よ明石姫
君も此事を承しくおりけは御門は御てさしてまうてさせ給ひつへくよ
いまそ成ちかり給かるえりてふよく御琴のありけるにはつかそ御楽

んかんにそはさく哥にも正月廿日計の事也風もこゝろにはらて梅花
さかりに雪とおもふ也源氏詞に御前の梅は年かはれと御子の公卿は
ほとんとあるかと女三宮はかくへ御ゆつられつゝへとらへやむことなき宮城
かの御すくえ読けるの事を思ふさるの笛夕霧大将宰相横笛つかう
まつりたまふ宮達は篳篥の役に侍りての色はうちに琴はこと〇たなひへと
御琴ことをまいりてすつ明石のほうさま琵琶紫上和琴明石姫君に筝
琵琶源氏のかくとも時く唱歌し給夕霧も宰相の君は御とくんつ公家
拍の音もきかりかしま女三の宮の御ゆきさ海をうへ給へは二月の中乃
十日計の青柳ニたり初ろん花は鶯の羽風にも見ちりぬへく
ほへりにほひて給桜のかそなりつまはうてうひちりみさしもとりかかりて
柳乃糸さ波二みり女三宮は君は花に御まさる藤の花のかすみ[?]て
なるふ花かを紀給かけの人を見てこゝまふ紫上は花かさらにても花
白まてやうはかはるさ刈くにほひに匂ひいにつらふ[?]
桜まさんへても御その[?]とひしめ給の中にて明石の上には
へさとうしてはるをさてさかしなきこゝろふんのそこ伊りこさ御て
こさん乃花ちの行さの心ねよまかまつめをひきさをふかさてつひ
たかくちゝのゆてらしなと高きをさくしやまもたきく五月給ふるなる花
の香も実もくしてすわまる匂ひも[?]おる月数経に[?]の
こつらに木をむかは秋の数にはにかはまする色しかるんさまて[?]
すくわるこ給ぬね拍子大将は中納言にかけて[?]の[?]の[?]
付ても女三宮の御しとをうけさ院ての宮のはわ〇まを御事女二
宮をと[?]元宰相うかつてらの[?]しかへさへ[?]なれいろくしく[?]
女三宮にんつこゝろに御しは心をすうけてもかくさめかさ[?]
よの小侍従かりよそほにかは紫上へしく院の御もいかなる
此院はよくかわ給ふやうかなこゝは一所とうへて給ひともせんとて二条院
へうつりたまひしたる又二条院より帰て六条院へ入かへくみかなるに源氏も

二条院よりのゝおりませいしにひさ給ひて小納言をよひつかはさる
人の御ゆるしひつけ給ふよ小納言も初て宮かゝる事しらひつゝかく
にいひきて何をせむか女三宮はあまりなくおほくの人のこともすゝろにはゝかる
てこのひ今宮は源氏のおりまゝすし女三宮はわすれのかしこく御らむ
あはれにてゆかりたかにいまさらおもひよせらるゝすゑのやうなるをはせ給はる
人なるへしさて年月たちひかつめるゝ事をもさためおほさぬ心のうちはさるの
二条院卯月十日の程よりは猶もさりかへりまゐり給ふよ又かひなき事たる
もかなしくはかなく
わさそひ宮も二つまゐれ時雨につくの露のなみたかちなる
くておとめたまへるはいまさら物にてさゆるみちかへるとの年の頃我国を
おかゝせぬ御心まゝ源氏に叔をこしまさるとうちに宮に我もひとまゐ
る姉こをはらと見まへくも宮は懐姪給ふさ瑞お之附よれた
かしますおりたらん女三宮はもしと源氏にさるまちかくさて行く思ひまを
きゝみやかゆまゐらせ給へはくかんのこゝろ時なりしに源氏の二条院へおりし
まゝなれとおもひしおりてやも見わかぬかねよ宮かやのさまをみ
まふとおりたらん大将殿は女二宮を見まゐても何くは女三宮の事をおもひて
女院へこう露まを何よひろひきる御はたまさかなれと
とちたやは落胤腹の宮のくさしは兄弟をしへ宮は女二宮にゆかて宮
此へ女二宮を露まのまかせしに女三宮のさに源氏のおりゆをおもし
太政殿の文をこをさかたを小納言ひろけて女三宮へ見せまちに人のまゐり
そこはひたくてこされぬ程本丁の内は源氏へまへもかくてお給そこを
ねのたにさしへさみ給ひつかしは二条院へおりまさんとすれは女三宮
わくやおりそん月まちおてもいかなるものそとの給ふこのなにしよや
おもすしやをらひ給ふひ何ともいかゝに給たくし月給そへまた我せこ
そのなほ見えとは右京までの給ふこそそれ叔は御給て鈞源との
かくよやさる給へとそおさまふるよ人のなさかせおもしてこまは風めるくそ

とて扇をいだしさせひつきこのふうくねこたひきらはうらきみにたまふにたよね
のはさらにほさみなうちうちをやうにまゐらる文の見るをなかふんなくて
見るかたにとこのまんなききさ申てたまめにえかくきかさねよに海をかまへ
さとく見給へはまさる人さらるて大鹿将のとへ給かくにもと給ふをえ
見るかをたんさりの御紙見付てこのふの文とえんかまもとさにさしてとく
源氏御覧じてなほこの文かしこき家まことにゆきいはまことのたにはしをきみ
てこゝすきにゆるやののふる女身まさて何の文かをへさとんかなまる給ふ
わうたまひてなけきてもひなきやうの文をん御ゆくちらなひたる
をやおもいにんのうちに母君をも見給ひしなひたるとなる文をとなとおや
こくおりて人かんなきそて見るのまくの人ゆをはかうかまゐりすおい
まつりひあるまもこえすかさるにいせつる文をとかうやくへと申すらうと
大鹿将をもんつひりさ人とかかりかうも家猿姪のたまいさとあつかいし人
ゆへをやしうしくいかりて母家もは給いひつきくかさりてへりすふひかも
なるかりく人めをもかりてうへさらにおはへさささゆと見へかふ大鹿将を
源氏おほとのもあなたがちにひとつ家のあひ給ひてかくて給や
こと給てこもかく給ひ給ひ源氏もかく給ふまはまいりねもいたうとそあい
らせさらるれは道のはのそまんわつさゆまいそれ給ひていまそ世中
おほかりくまひやもひもなくおもひそらつひ給ふを女おもて小方を
まそいおかつちうすとそ母二家のまはおはきるを秋辰ましてわかた文
おもしかくおもひさつうそいのりうとさ後くしまてそわか月数あ
家しすふ太政大臣致仕の家葉らかひひけくろ太大臣まて故大将をと
給ひ給ふえかりといとの世ふとうへて用ゐ扇にさて扇とるは檜扇
の事之花は風を用りなかにわらもを夜の扇とは論のをかくさま〇ひはかく答そ

・柏木

太政大臣は六条院の道のつきてまの御心事もなげにいふよく世中にゆら
さるべきやうもなくてこれもみすぐにやもひろくもおほくなきさらつまでに

くさ〳〵のやうにおぼし時女三宮へ無心て御文奉り給ひてもまたかけはなさせて
今はそれほとにふりもしきりまさるへきをひのかみやのてらん
なにかしやかてもおんのかのゝのてらんと大臣へつかはし給んもうさる
にあるはおかりさらんとの侍従さ源へまゐ奉れは御返事とおかりて
立さひて消やらすすへき事をなとひこゆるうくゝへり
はかなる消給ふにもやうてさらんとたひのきえりとてうらみ女三
宮の御ことき(?)わすれて一夜ゆやにはるかひの御目さるおかしたはおのこ御子
生まれ給ひ源氏は御心のうちに我か子ならぬことおかりわすれは大臣
給ひすひとり菊つかの女御とおもしなりて水泉院の御末なひかりし
なめりとおかりなん柏木に密通の事ゆへおかりうつるのこまさらんや
おほせは家はしつめてよきなやしもおかりなん思ふかては家のおかりますかに
さしのさき給へし夜なりしにはおかりのこもらすかくてたは家院院
またい御かたなれは又御門は又見しはかなくてやわらかと
のすさまじき比は世の御くろかわやかにおわしつゝ六条院に御筆ありて深く
御抱給ふうまつらせ給ふ宮そてらむ家の宮をうかくおはしますかとき
にいはるゝこそうけ給はしのすさまじき流れもありますべきにはいまは
給ひしうちおかりきりつのまへは御こゑやうちからの御さうをとこ此男も御家
にて後世のためにはせ給へさかりて父御門おかりめされは院はふかく御方ちか
かくて二条に朱雀院の宮おかりみちたまひし女三宮に渡らせ給ひし宮を御覧
おかしませんとしておもいそと給ふ右大臣殿は若君の生まれ給ふまゝにてもあはれなる家
三つにけふ抱まゐらせかくて給ふかまゝにさまやうこそ御門も家におかり
このたびは儀は権大納言なる右大臣給ふへりもよ付てもつて父おもしろく母上の御おほけき
深くらす大臣殿も夕霧大将なりしかとも申さて二条院中宮は紫上のうへに
源氏の君はかくなん給ひの事かうにさしかくし深くさし給ひは御秋小方ありたい
めんとまひくつかまゝかくまゐし給ひねは父おもしのゆかしき給ふ小さ給ふはさんかさ也
生まれし身より元年三月の御誕十月まへにはかりなまじへのいさひるかれまして

なほ又人もすこしわかきは若菜のうつくしきさまなりといひ捨て世をそむき
給ひしかばすこし宮への給ひて六条院
たか世にか種はまきしと人とはゞいかゞ岩根の松はこたへん
この給へるうつくしくおかしくてひまもなく給へりしかば見給ひしかば
こゝろ給へるに大将殿はなかなかにしのびてこそかくれんの事今
かの時は夕霧へさ浅くゆいこんの由にて一条の宮よりつかはし給ひし
事どもおはしてかの家へおはしたるに宮の母御息所たいめんしたまひて物語
のついでに庭の桜を見給ひて夕霧
時しあればかはらぬ色に匂ひけり片枝かれにし宿の桜も
かれにしは柏木の事なるべし御息所
この春は柳のめにぞ玉はぬく咲ちる花の行ゑしらねば
玉とぬくは涙の事也下句は柏木の事にやさて柏木の父おとゞへおはしたるに
てよれる御息所の柳の芽をみて世にある人は涙にくれなりつゝ見給ておもく
木下の雫にぬれてさかさまに霞の衣きたる春かな
子ゆへに服をきるといふなるべし夕霧大将は女二宮をとふらひて
なき人もそひてかよひしかねどもまてかくて卯月の頃の
庭のおもの庵の梢のおかしきを見て
ことならばならしの枝にならさなむ葉守の神のゆるしありきと
葉守の神は柏木の事也女二宮をわれにならせ給へといふ心也
わけてもいさゝかはなしかたきに宮はこゝろ地ならぬよし葉守の神は本の性
かしの事なりけり女二宮おもひ給へることにて
柏木に葉守の神はまさずとも人ならすべき宿の梢か
大将殿かくいひてもよそ人といふべきまじさ此巻に文詞にも柏木
やさしければ是の名もせり右大将も柏木とよへるなり
● 横笛
是の名は前にもとし笛を柏木の形見にて夕霧大将へ人へ今にて笛をえさせたまひて

[illegible]

せとどうまいりうんのいとうもおわりところを見て歌よ

おうーあと二蓮花生のんーとるれ今いとくはれとうまいりうん

はいりおうーあしてはい入はとしてーけ行のうと葉こひうりうの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

横笛のこと

横笛のこと[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夕霧

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さいくを三つめのふやうにて本丁のうちひらきあをてゝ人をもつぎてゝ
こゝろのかぎりをつくしけまい所をとせてゝ人のふにゆかんくらもつぎ
うつくしけふそはくつのうち屏うまてゝ家ぢ所ぢ年ゝきこもる御
いろいろくひろやうなるよ我ゝ世ゝ
しとえやそゝ我きいのさくうにいわさめをもつぎりあきいうをゝ人つも
をくつのすまきこうに記せ乃ゝ人ゝ
けうくもいつゝくしぢよ我もあ我せゝやとおせとゝひらはゝ
まとおりまんいあさゝこゝにんのおりやきゝふ育大将のゝ毎琴歌
きのひも秋うちふゝ我の事もおりおて父のおくゝち

いあ月へ乃秋さへいさうの花てゝ秋ゝ歌ふ
とさそふゝ今の浦乃ゝ月ゝまふゝ人育乃事成へゝ我ゝ秋ゝ毎へ
源氏も琴上の事をもおりおんのんゝ家にゝおひひあひて出

わふひの上と父のおゝしい殿うゝまきいひうゝ乃ゝきもたゝ今の回
かゝ秋ゝさゝとゝうひのやうにゝゝのゝいゝ内ゝいゝゝ乃ゝ秋ゝ毎ゝうぬへゝ
且秋ゝ乃のさゝにゝうゝ記ゝゝとゝ信ゝ出ゝうけさゆへ物篇ゝ乃ゝもゝ秋ゝきを
秋の末はゝ秋ぬ中ゝ高ゝ乃ゝ学ゝ秋

秋ゝうゝ世辺をゝうゝゝやなりゝ記ゝ人乃秋ゝんゝとゝうゝあゝうゝ
琴上ゝ出をゝてゝのひゝ人ゝかゝふかくのゝくゝみゝ乃ゝ琴ゝも八月ゝまかゝ
秋ゝ出ゝ四ゝひゝゆへゝ信ゝもかゝとゝくゝそゝうゝ秋ゝ出ゝ毎ゝそゝ初て明石の姫君を
中ゝ高ゝとゝかゝきゝりゝいゝつゝそゝも后ゝよゝかゝゝつゝ人ゝてゝうゝ源氏の君ゝ法ゝみゝかゝくゝ乃
ゝゝ今年六条院四年ゝ六十一歳ゝ

四十幻

ゝゝ琴ゝ琴上ゝうゝ乃ゝ聖ゝ年ゝ乃ゝ月ゝ乃ゝ二年中の事をゝ乃ゝ見ゝ記事
乃ゝ京氣に付ても琴上の事を歌ゝ乃ゝ物ゝ記ゝとゝいゝんゝそゝそゝ乃ゝひゝを
ゝんゝのゝにゝもゝ毛ゝにゝゝのゝとゝせゝうゝひゝうゝとゝおゝりゝ物ゝて毛ゝそゝて我ゝ乃ゝ秋ゝさゝあゝうゝま乃

我やとゝまりてちやをのみ
宗上おりやをぬるを花のてゝちやを
わかうして始へらさはりつきこうをのみ
業ちやをもちわさにつ始て
つきしりさまにいまへの物語せさせ始ひとり孫のまに先祖かな
なる世の中よ我ぬ色のごとにちて宗上乃はつをさつりをとゝや
ふ女三宮うつ一きちり時ことふ
ちさはの月ーつとんもちうこ
なるを我女三宮乃ふおりのこりよ宗上喜よ月ひとしを
ちゝをわかをそ我ふくむて宗上乃ちへおりりに
のをもいちりつ
ひつはあるさはうをを又いつの世ちの月人をそおりはあるち
はあるひのまちうにはてふつりておこうひちうこ
おこてはいむちけ者ち初ちのさまうち弟世の事おり
にも入のふへさはもちきうれさふ梅人くも仮ちうん事をとゝなひ
をちてちさかちへ三宮ハ母乃の始りそたのまへ乃ち梅ちちわさ
ちをとゝ始ふを人ゝ春ちを二月ちをいはさみの梅こ雲乃ちを始て

六条院

樓ての月ち花乃ちうーいかりに宿ちこてすちかをて来ちち雲
ちひをちん花けちはいを梅をもこをもかかくいへちん紅宮ハ六条院
ふそのちへをふく成まに宗上おりちちわまへのを梅めてのこにあち
て月ちふまも乃ちれハ世のれの位あもかちしおちうかち花萩
ちちふ八重ハ花梅盤ちをちを梅いもけ春ことれて名付なちすち

とそくとぎこんをとりわけて白く極楽のひんかしもを行ふに
今はしてはいかゝやもそんらんの人のをとめ乃姫
ゆくゝうまし賀茂の宗乃月清つまくなるまに荷ものたるうまを
ゆく中将の天わと云女房のかゝる方に行ゐこゝもて月ぜんあつひを
きてゝまを動てうゝねゝうゝねゝふゝさかりうにそのあつひをとり
てゝ夢乃名ゝよりうゝの姫へ中将の元
さもてそいうゝの水とゝみまるあるゝ乃ゝとまるゝ合すゝ
ゝの水とゝ神前よりゝをゝゝとゝゝゝ水まるゝとゝ第上
ゝれゝゝんをゝゝゝ宗上乃ゝゝけゝさゝもゝ事なゝゝ我ゝあゝゝ
てゝゝゝゝゝを行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
しもあゝゝを三を行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ四ゝ行てゝ世乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
世上乃事行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人々ふる我身もまに合わぬを悔りおかう海ちりち
まさるまま永九月九日とて菊を折りて
後もにてをれば一首の歌あもひら殺よ到れ秋風
ゆまぬ命をこそ幸ひと海ち所の翅も浦山しくおりて
大内をとうふまつり一首なさに月こそ秋の物思ふ
所をまつりとまり西方なしなつ到ぬの花を尋ねと来乃先
ゆ手をとりて祇園月に対面ちよ夕暮乃元の年ここも人かそさり
十一月よい公義をつひて世中乃とめうを如に有大武の姫の公義に
ひとり居りし事を法きく有ましかれ
高人ことよりあちに急くふ月ひけも立てくふ法武
家にりけのことを用ゆきそのんもこちふう年ゆて法山花を
へしとおせ年乃書物もんかそくかれき事いそちそや高
知れ九月きと文をやせ命に深ちのはもとこに沙ひわせてちふ
ふ人爰ゆをまて言付ふ吳今のやうゆとゆ年のうち分は言ふれ
ごとひりて言ふ北人二三人計ればおまへすやせのふ大きの人の
前乃ゆ人有と如ちふ表なふをまてかこちふ落法海の
水ふきなれそふをんふりと人ふ月とそやりのふふ前乃ゆを
月ゆふ付てもかゆきうまちふ知へこもう立ゆ法
こと文のうこりは

うこ法ゆそ月ふもひふーちは者ふおれを年乃物りこと
なまや手付て法やせ多ひつ立ちそに如て法佛名も今年ゆを
おりをにも来なふ北事を稱ふも佛の方ゆんるかそちふおか
すゆ法師とおまへにゆて法ちもとに法くなとゆて血の涙を
ちまてゆ命も言ふ者乃中に公付梅とふこふてん
ふ書ゆとおりをもんかふこに若衆の名屋ふんそそをゆこ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

源氏の子ども[illegible]
[illegible]
世二の毛はなのうち香ばしく聖徳太子も全身がうちうちと佛の
相とのたまひ色よりもて薫と号を白玉花蕾香とやうのひて海
のたき拾わすり事を紙多くしわさ物語ひ海苔のてんさいに芸梅梅花
し枯老とそこそこ常花とところへひりて白玉と名付
枯乃はすてめて始りこと[illegible]
葉の白ゆりしはをて世乃[illegible]
に三つ[illegible]
まきりかりおせ孫世中に[illegible]
おりと仏二宗都世し始へりと[illegible]

紅梅

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]

竹河 [illegible] 又竹河の巻も是の名をいてゝの人

宇治十帖

橋姫 [illegible] 廿二ゝ

宇治の十帖なる物語は紫式部の作れる大部こゝに出かゝるとも
以一説を是の名ゝ[illegible]も詞ふるき業平朝臣十九歳
こゝ八の文ゝとゝふるき文[illegible]ますハ桐壺の帝の御子原
氏ゝ[illegible]ゝ[illegible]にてます[illegible]院春[illegible]ますゝ
時朱雀院の母后芸子[illegible]ゝ[illegible]ゝ八[illegible]
けなりんとたゝこのゝ[illegible]ふより冷泉院の方へなれ
ハ源氏なとゝふも指ゝ[illegible]れ[illegible]にまして今ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
に小の方もゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

舟まつ我桜のもとに学問せんよりはいとまなくとも
てとかくいひよりのもしもしかの通のふ姫を逢
れ産するなり実のもてはさすのうちなら法舟ける
に秋の末つ方は雲にあてて、ひのふ高佛をかつ
らはかの書もきけつの山けれいとて物習のわさう
の法学治れもに梅ろひのもまの舟ますが蓋
ハ都のもとて学治の文へうるにて波のもに書ふこうて
蓋もえ元ぬしき本れ中我分入のもにほろくと
歌このる本れ歌の歌しよりは袖もいうぬれ不れハ
習のもぬ蓋にて人間く思されける
山おろ小級ぬ本の歌れ歌よりもあやなくも

人なれハ文れ行て舟ます振生のて誠の古
都なとに学問せんよりはいとまなくとも
てとかくいひよりのもしもしかの通のふ姫を逢
れ産するなり実のもてはさすのうちなら法舟ける
に秋の末つ方は雲にあてて、ひのふ高佛をかつ
らはかの書もきけつの山けれいとて物習のわさう
の法学治れもに梅ろひのもまの舟ますが蓋
ハ都のもとて学治の文へうるにて波のもに書ふこうて
蓋もえ元ぬしき本れ中我分入のもにほろくと
歌このる本れ歌の歌しよりは袖もいうぬれ不れハ
習のもぬ蓋にて人間く思されける
山おろ小級ぬ本の歌れ歌よりもあやなくも

ろき部屋哉　雅平く嫁ますに琴のねきくけのれ
ぬ程よすこく宮えられいハ
かく思ふ我よきわ郎と思て入ぬ
ひ糸いわらてひと我けう
ぬ和のら身にこて面白れい言ぬ
葉の花ますけき我知てものの
語らひ合もて抱くまに
て見ぬ八月の面白に笑を捲て姫君達の
しけるこ大姫君いハ程ハ
ものも我ふまさこりに
つる月のかたかハ指さ
月ハ抱きつへうけりとて
聖のとふかこき割りて月我ぬすもこそわ
れきまこに思我そひのふとて打笑るけを
ひよそにて思ひよりハたらひなしと思ける程
に葉の花するとつけるまや笑ぬしてい入
ぬ抱るものの思へてわ
嫌く思ふことにすこし
ものの思宮ものの思ハ打とけしてこと
我宮のるまやと和のく思ふとそかて笑
の程ハ花てもく余くるも多く才なて
只志の程を見えぬとうとく賞めてらひ
こと思ふに姫君いらけき計を引入ぬ
のりハ老人書来て何角
聖のとふかこき割りて月我ぬすもこそわ
れきまこに思我そひのふとて打笑るけを
ひよそにて思ひよりハたらひなしと思ける程
に葉の花するとつけるまや笑ぬしてい入
ぬ抱るものの思へてわ
嫌く思ふことにすこし
ものの思宮ものの思ハ打とけしてこと
我宮のるまやと和のく思ふとそかて笑
の程ハ花てもく余くるも多く才なて
只志の程を見えぬとうとく賞めてらひ
こと思ふに姫君いらけき計を引入ぬ
のりハ老人書来て何角

戸ぶ物語ゆ（きてゆるして）柏井の女こそよけれ井
のるゆ我ゆ物（こそ）（ゆ）（ゆ）（ゆ

ん静にえのもとにかくらのふせんりうをねひとる袋ホ
外ともに我へて神きくこにて以我ゆひつふうつき
うりとるとと云字我ホ山より完て又人多へ女こえより
の山返し又病をくこて至遅まるるも叶難く
又戻よ此のつる事第三の志の生れのつも猶らしく
実待るなとこまく無ホ変ゆ方をみちのくに我よ
ホ枝よ多の此のやうにもて
めの第に式よ我そ山くこ三よりもよこに分て
動そかなりき業ホ事我実略らあのて淘生変も
かなしくも思ひけるとこ
椎ホ　序廿こより廿四の夜を
宇治のまに姫君の発するきま我業句よ山んに

移りける計常こ移りのを多あのきまてゆ
のくに思けれい二月廿日の夜初せる清のつの号
治よ中前りのて彼姫君遅も書度よらんとの山
んこ扱泊瀬の海るこにうちよ夕雲に紅のつる小
るに三まり給京より山近に業我初まりくこ
第りのつ山遅なとこ申し所よ宮乃枝かつけて
山桜かほよわたり小暮きて回かこをちり
てけるかなこなこのを三らこ宮我影も形とえん
風へしのくいひてしたこ三らこの山ん山遅
しおこうとの姫君事ホ
かこしをる花のこ三に山桜の枝ねをるね
書れ旅へここへの山おとつれい宮我形のこのホ

海そとこなすとしてんの梅花見人
ゑのもほのかさくやとおほせとくさりのうれ
ハ蘭あて海のよ葉ハ三家のこそ手原葉毋ゐ
七月よ吹て海りのよ新にいまこへこね秋のけ
しき者ちの山も袖をくて風の者も浦やうに桂
の山へも多ゆて袖へ見すよ多袖のて常より
も神やこのに山物袖をて彩なここんは姫恵
逆をこへひのへなとん細けよの袖をこの袖は
んのてこのくはいんと表よ見て海のよ秋深く吹ま
にまハ袖へ神く見して袖のの先する山沢袖袖
て四季のに紅のよ名佛つとめんとて姫恵逆へさまく
の表成幸えいひ直のハ沢袖ますハ沢袖をも

強ゐきこまるこなくかのくうんまちて袖袖ね
姫恵ハいよく沒なきまるに金佛の三味もこそ、
海のよこのと待葉りのへハ山のて病身のて袖なく
隠こそのね姫恵逆のなけきのよさまいこんかな
八月廿日の袖の幸こ葉毋袖実袖てん細けよの袖
ってえくはちんとてなりと見合せのひ形し
けよのの音ちを見ってハこそひえこうき
このけりハいこなとこてこはるみつこのこも
うちに先てまの形音のこのつ大
姫恵をんのけのへハ多ゆきこるもいひもらし
のひとこらす新なれいおのつのらんのとけのもん
をここまこあと見ひて海りのよこのこてここもゆ

にけれいと思ひとて書を数降て女房をこへこのうく
思すよ事なりてい嫌なくて学法へ河りゆつるもも
叶ちと思ひて書の中に波のよ四尾石の板なと
城山後してもその方の方ましまける時の事思ひ
当意ゆて人まいしのみる佛のこのうなと付ハえ
の方けるゆよこのもらわねと四尾なとも反掛うる
に我ゆ意せはこをを形まんと思けるをと思し
くて

こよらんかけと形し推の中意変ゆ尾に嫌ゆ
けるを嫌ハまの山所をこして推のなといつるか初部
ハ推の尾なとにて行ふんるを老の名ゆ家加こ史
の方ゆまきねいこまりのもちんるも波なくて日参

ぬれと海のしこ

鴛鴦　廿四

老の名ハわけ老と言ひ加こ鴛鴦と手附ハ京
のわけまきこ鴛鴦と書てハ牛飼ひらハなとの
るこ式老のハ鴛式事こ八この一図をの事をいと
なこのもちんとて嫌ゆ強佛の飾の事ゆ
机の四角よみこの糸をこのきりてさくるるを
糸のくこなとしのわるこ葉平なこうち波のて
当海人のにわけまきなとしの我儿恨のほこ
ろひより人のて葉

あけまきに長き繋を結ひこ右同し右ハより
もわもれん大嫌老と一右ハまろひあひこきの

んこうるさくいふ事なのゝ姫君返し

ぬきもわすもろきぬの袖をよ長契ばいて
むすもとゞまるものの情うつくしき女房のゝもまた命の事を
いとり命い祈なすき物なれい未也こと契らんすいか
ゝとゝ姫ゝ　蓋い所君をすゝんゞ爲のゝよ姫君い
妹の君を蓋にわもゝて部い物語ふて世ばもゝ
さんとはこのらひ給中なゝその君いかゝゆつらるゝす
ばほいならす思ひのゝて未の姫君をは白ゝの字居
てんよゝもゝのゝ引わもゝて部い姫君をと爲つ
ゝ就を所君へ中のゝと白ゝをあゝゝと考てうけ
ひのすゝまゝゝよ思らゝるゝ就大姫君ゝるゝ
思ゝなゝうゝ父ゝの遣ゝゝのゝす大方のんよゝた

ゝきのゝけれい物ゝゝよ對面ゝすゝよ思のねてい
りすゝ切へつゝ一京御らひすゝ以一筆をいよゝつ
らゝ思ゝゝゝ度ひゝすゝらつれなくのゝ成まゝう
すゝ九月よ姫て出發ぬゝき於のゝらんゝ切ゝかり
のゝてゝゝゝ先ゝつ例の中ゝに對面せんゝとのゝし
かゝと爲家ぬゝきゝのゝぬゝるゝつけゝも物思ゝなゝい
ひて對面ゝすゝのゝくゝゝ物ゝけらす部を深ゝ姫君ゝ代
りよ妹の君をわゝもゝ生らんゝんゝのゝまゝゝすゝを
就な蓋ゝゝものゝと白ゝの懇深ゝうんをゝひて
用のゝす姫君妹の君と一所よ大度ゝりたるよ
ゝ京風ゝてゝゝゝみなゝとひゝくゝとなるゝゝれよ
蓋思のゝけゝゝき就姫ゝい字つけのゝやをらす

ゝりおて信のね中天狗のつくるを新ふさすへ
と思つゝたひよりて行らひすのよわらねへなり
けれい嬉わ爰い思せと情ゝ爰流らひ初きて帰
のね翔雲い白ゝ中天なわをなきらんと思ゝ
にゝらひ金せなりてよきこ日えらひて文を誘ひ
なりのよまつ字流よ中前り城求めて為を音
なりくらきまきれよゝまして文をおらまき
せて無といよ女よひ金せのひ新出ひへまねを
て文を入なりのよ新い姫天と物ゝよ流文るを
物流ゝて初ゝもゝこのひ人なゝて又初へのへ
きけをひなれいゝゝひのゝれてわひのをす白
ゝいうねて思ゝよりもゝくひなゝと思んゝゝて

思けれい思文通ゝゝのゝゝもゝ通のよ
うゝゝ爰思出ありきよからね事と父師門出
なといきあのよよりとかゝ人たゝゝひのよまて
文爰とゝえのの我字流ふいゝれをよ思んあ成
と字をと姫天無ゝ思のとを神なり一日わ
しゝも高白かんと白ゝを中なゝ爰すゝのの
つ初系思流よとて初ゝけると思育けれを
夕書のおゝの思よ宰相中移を所移のゝゝわま
ゝつゝひのよ思流よ姫天の新ゝ移のゝゝ
新ゝ（れいゝんまうけゝ思へ移のゝゝ
けれいみす爰の（爰のゝれよつるゝ新ふかきゝら
ひをゝれゝゝかきやりなゝて文の流まき

んとすれども、あまりにかなしう思ひ入りたる
ものをいかでかはなどいふ。師綱と聞えし
なと、実はいと我が姫君を思ひ
によりて、ものもいはずなりぬ。人々、
かくて後のちは、事と思ひ入りたる
ものとて、ものもいはず、
のみ泣かるるに、
とくとくと、
て、
思ひ
て、
人々の大夫なども、
てい
ハせもの事なれば、
ものを慰めんとて、
いよいよ
物うちの通ひもとゝえん
人ひらひよ
まに
の君
すれいの
と
ぬ
て

なのらぬ家のものもね
まんよりあるよ海のもの
ありきよりのらねぬ中
門所、
ひ
のきらもの
けれい中
なけきの
なりて物
物
ものに
ものひ
ものを
ものを
ものを
ものを

ものして此枕のことをくわなるものの
ねるに此事をうらへて語るのしるべに
給ねるよわひ幼らてうこと
こそ侍りつれと長の下にてのものつ
で妹の長成新参と思て侍人のなとい
ひ重つ此年廿六にてつひに濃人のね申
後ハそ者ゝ後のもていみしこのりて
すのなりより生なれハ此身に新参せらやと思
せとあるなとの思さん事も悔のふかくこのり
おとするハ人に申ほするなりとて部
より方これ此とも〳〵ひ内城初侍りてとと多
かり七日〳〵の事たもいたうたふとくせさせの

ふ者の像ひわもて御わ者しに侍て用の物を
うる城ゲ老ちて見のひむこうひのちに侍り
契枕を歌て実のつ
おくれ〳〵と京の用城したの家つひて
つき世なるねハ姫長成月所てこ侍そね世
なれハ新参の所をしたひてなくなるやのん
まくうせのる人の事こう物より侍るん
ちなれハ
高倉て死ぬるくそのゆのきに者のよ
ゆや改げなのしとは改て入るやのんこ
天竺の者のよ葉を取とこ御くんのこうる
姫長なれハ行へまて忘のこ思けるこ井長ハ

後に二条院の西のたいに移されつゝ彩雲なとまうけて住給ひよりなり

玉鬘　第廿五

光の名高くなりまさるに宮仕の中に姫君の御事を思ひのこすを人々なげくに花の色なとも枯れたるに折しも初瀬に詣給ふとて御方々にも告給ふに返し物をと思ひ出て御使給ふ御文の書様なとにこゝろ尽しける事のわさとの詳よりいらひつくなと驚ふつて姫君の方（猶のゝしりとて

君にとて行まくの表紙つゝこの程雲ゐ

れぬ初ひらひなり常陸宮

ぬんこ摘の字なる様をよもたるかは歌詠ひ人ても姫

君の御母なくなりにしかは迎へ出給ふ

はは君は姫の人もんなきの御ことみとつある事のさはりひ姫君なれは誰ゝこの人もんなく

老の名ゆとり母と寄にわれいこ桑寄生文道
よ寄母と云こゝは一字なるよりあり義書と字ゆる
ハうもたし　右大臣殿の御姫ゝ書今は女御なり
はゝ殿よ女ひとり有ます女二まとて御門廻
このゝよ母女御ものゝ物語られいよ義よ
思ひて後と聞きくよあるもんと思ひわくら
しのゝ業大弱河事もうゝひたるくなれい婚に
と思ひて文をほのめかこのうんの門をて門ご
のうきこよ業をを寄のてよきかけ物よあれ
ともこのゝ義ハ後すはし何を義とのてうた
せゝよ大弱陽のゝ物ハ思ハそるハ門の前の業の一枝ゆ
うすとのゝ思ハ大弱業殿物て

よの常ゝ殿物よ句ゝ義なるハんのまゝよ物て
人ます殿大方の人の庭よ句ゝ業なるハ思のまゝ
に物きを樂庭の姿なるハ部殿のゝ下のゝハ
女二まを部物よもんをとうんゝ御門廻
業よ物ゝす物ゝその業なれと殘ゝ文ハ
物もすゝ殿殘の文と女二まの事物ゝ物せ
すゝハもゝゝ殿んこの門中ゝに思ゝ右よれとも
うきゝゝうちの姫美ゝ文ゝのゝなきのてゝ
ゝ方ゝきゝゝ事を方書ゝ大臣軍のて
部山姫の六美ゝ業殿合せなるんと思ゝ殿
物ゝ思ゝ殿戸殿ゝ六美思ひんよものゝ御
母右ゝかゝちよりつゝ句ゝ深さものにゝより

多成ひんなれいの物を[illegible]にうけ別のね中毛はさす
御陣笠て新い数なるね板なれい山中方に山ん
数のなは人りらもれ御[illegible]と呼ひ乳れすの成
白まいよ〳〵毛と毛と呼ひ毛うへき事せの
のつて物うれなく御ら〻ひなれて添よ物を呼もせ
んてう〻遅く呼のしとて葉大れい中毛のたく
なるすてなかきのの形毛れいんの中毛よ
呼のつて中毛の毛すす二重花厚のの形
毛の多毛の中ますりるを形てりてせ
のよ白まい肉系の毛の板を行よ毛
して中毛と板〻山物御るつて形のる形毛城箭
ますて足のへいかく〳〵あの形城すたれの肉

より指いれて
よそ〳〵て足るへこのうけける白毛御れ数の直
し樓の毛毛一ほれて深い毛御を毛よよそ〳〵
て足んとるやのんいうせふ〻妨毛よ中毛を
よそ〳〵て足るへきと毛んの取〻山遅し中毛
消ね百に指ねる毛れて百れ毛る深る毛毛
指て毛まる毛れる指ねるい妨毛の事深る毛毛とい
毛毛のるへ消ね百るいい毛の消ね百るよ形見い指
ねるんこのあ〻れ山物御毛たて飾り毛ねもへのあ
や〻毛毛んとて海りのねの音のおそい白の
毛を山女の毛毛に婚ふ〻りのんとて目えるな
ろして山近て山のの形中物を毛らせのつよひ

所のねぶいの中宮の方に参りまゐらせけれいと如若
をさまりくいひ侍りもてての詞は猶用なる見のそ
よんこそなれいとくゝ中きと学えもきておの
にりうき存義中宮のんの中四宮さへ義淵の
すれ風の言をそのもてもの新の中なのゝ学治の正
置して学正初つ
山ゝれ松の信ゝよ増りて思ゝ四すて
風いなのうき枕白ゝ中宮の所すの方ゝ源り
のの事ゝのまゝなゝて少書れ初ゝのかよのを
所ゝ事ゝひまゝ業の大弱二事信ゝ所して中宮
ときゝうすゝれなゝ計の間もて大方の物語根
こ物に出ひ侍りのゝ抽

をゝゝゝ引ゝんとゝのたつきて初ゝて
そひゝのね女ゝいゝ所も取祖なれいい
ゝ筆ゝ自ゝにゝゝ所もゝのしゝゝ手
り白ゝいゝ中ゝゝくゝゝゝ成部なのゝ
根ゝくゝ四て源ゝ波ゝゝ今更に打ゝむき新
なゝんゝけゝゝねいゝすゝまに物語なゝし
すゝゝ四段ゝゝゝゝの筆のき
ゝれゝるなゝゝ義ゝ業の四ゝ四ゝ
るゝれいゝゝゝて二の之ゝ
に女ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝくゝねゝくゝ四て
まゝくゝなれぬる袖の移りの成神身にし

やて眼つる事又の日も白又二条院よりまゐ
を葉をのて山路さいきいりるとこ中将より深くし
こては彦右人のなるよりしぬ事とは思ひ
思ひのねて又靜この城夕暮ほ二条院よりほ
けるよりなく物人のしこころのへは山ちな
やまきこことつりてうとくしけよ人侍して物
なと宮えすをくこいつと宮えられい物こしよ
對面こよ又を有のへきはけきぬ見て物と
しよ女房をよひのへつ物若とおこへきて
けるまは見ます物のもすうもの
姫君のの城忘りきまのの時よ中
君深舟の事を祈りもしかの方信れて

侍中将の君としてさらよ女房にはよのは山のこの
りつて山路に山路初果けるぬんようす思し
て又ともはんをよもものもすぬ物屋はひのこ
ましてはまもは高はもを中君と常陸も城人の書に
物て作りこの山路をりて中君とも新りとこ
山路の山路を後深舟といひこ中之葉よん城
よもらこをを若く思して姫君の代りと思
て山深舟よんを通ここのをもはけのん
こ姫君よく似る由城御のへ大将ゆうく思
して行へをくこく間のへとこのはしらね
中城のの最後こんよき山ともれ中君にもと
のの思ふこの通ひ和とい

んこ中元の四毎毎の四のみをもてまし
ますこおもをとのすつきて佛よなるん事
まそふいのとと中元いらへ紙ハ長ら人程よいこの
のんこ時ちうまくなめあきうるこれを成者
して海のへ大雨之費うもれあを見のそね
とて九月廿日の程おちうちうるうるし板ふも
ありす荒うるを京と初ほして彼年とふ老女
やし初て昔今此事沼のひ京中元よりも四も
よほしまことなれハあきうよひとうのて大雨
元の一関元の事宮沼のしんてんをちのすに
ようきて四りのへらるへきうれと海ひ合のち
の例よしん度成ふそうう時波のうんとのんの

毎の尼なと成前ちのやうきあちら
まこをを沢ハとまりのひて中ふのいの海舟
の事毎の尼ふ同のへハ時素紙ふうるを宮沼
四宮四うハくせ毎の事ハ廿中なんと
てわらんを新見ふんの程海りを沼よをいひ直て
海りのよあうちの海ねのさまの人原しの
に本相ハて茨宮うる本素成海ふうる海もな
く原山本やとりたる書ハ此文鎌りうるをふとら
をのひ二条のへと見てもものとて
やとり本と見ものすい本のかた猫ねもいうる淋
しのうまし海りのて時素成中元よ第らも
のへ形ハ白まおとし四流てつハ日中にいひ

[illegible]ひのかもとなしと妻のこゝにけるとて
おもかのせんさいの中よりをとこの手紙持出て拡く
よむほどおきさしたるも霧のおもてもかすみ
る我ゆらんし白文
ほにおね物思ふらしゝの落花て秋のつゆ
しけくしてほどおねとい葉の事我いひこそ
ねん中ふい中恋の思さんとこ葉を中恋より拡よも
んのんこのまいなりつきを程のゆそになほ計
をきすてひとをうらしき洞ゝらへて寄
る我女恋も引物にん我いれのいきてうのつま
より都をさし出て見のゆ百人まほきさま
にて女恋

秋ちる物しのけしきものすきほのあ
く風ゆつけてこそれしの葉ハほにおねものと
このてゆとなとも女恋ひとをもより語らひく
らしのこそ多をの二月彼日恋葉拡大酒
にて有恋のけのゆ同月の廿日餅の祝女二こ
のゆきの事てゆ日葉市門の山塔ゆ宮りて
事初のゆ彩のきさきき天下の宮なれいひひ
さんゆこのこてすゆ極月一日に大弱の方へ
女二こを渡し給んとこ拡すとその日女二このを
こする蕭壷市門渡らもすて花のえんしのゆ
を宮御殿上人糸り集のゆ山遊さぬくこ山河葉
拡所より海り糸こる面我昭ゆこやこてこ夜

女二人まのてうせのて業大納の許より梅ちひの
山形のさちう又いひの（こうてうしかく面てうしきす
なれとうせもしうちの姫君の母い君のきうし
ちそかりの家なとて業うちへおちて仏らせ
母上君なとうへ母のつ海ちんとうす行より浮舟
の君初せに語ける後さうちの弁の尼ゆ許て
中君りしうる我こいまうんしのひるるようせは
姫君よりく似なりて形よりいすくれいいのにも
して彩物よせちやのん涙ゆれいの衣の尼より思ふんの
移をいひ語（よと責めるよ尼ゆほせと語なとし
けり

東屋　廿六

常陸宮の北の方より古ふよ四女二人又常陸の女も
見ゆるよまの四姫を思面おのの子とよ婿取て
加つきゆれい男我姫やしく思つあなつらは
き様してのうへ人よおちまうんよりいと思面ら
して主の姫をハ中君（形あらせて二条院より主の
所業大納中君（条のうる自よい母后の四なや
ゆよりて内（条りの移こいつのうなれと
中君と物語なとしのつて常ゆのるよの姫君
こう許よおちする面ほのあのうのいい海ゆ
やよらすと思れと打つけよんを梅うんも
いのうとこうほりのひねゆ大納中君（むつま変ん
をよせのつのようゆ舟の君より思ひつのを等て

部屋よりこのる事なのこのれんとのんこ山門蓋のは
ふうて

又しへの物ゝ語なるいと身にそへて変せ、
の梅花よせん又しへの形に似る人なるいと新身
にそへて昔ゝ人を忘れ変とうせにし　大姫君の
形見とゝいふんこの内返し　中将
ゝゝきゝ川せにおさんなて梅枝身にそへかけ
と袖が新まん梅花い流す梅なれい涙毎を思梅
られていと涙毎の物ゝ人ゝての事ゝ梅昔の人
ゝ形見ゝ見ゝ問きゝんの新をひらせる
なと涙ゝひ見て海のね涙毎の思い二重院の西
のひさしの雪ゝのようる局ゝ立ゝ物ゝ或時

中将い涙毎ゝ旬ゝこなるゝ物なるゝた
こすゝゝ物ゝきゝ見ゝい西のゝ方ゝ又別のゝね音ゝの人
ゝゝ物れいわやゝと思て梅のゝゝきゝのゝゝ屏風の
ゝゝれより志をん文の道やゝの物ゝめ事花の切り
梅ゝ見ゝる袖に梅ゝ物ゝる我はゝゝゝねゝ糸
の女房にやと思て物ゝてゝひゝの我涙
舟のゝのと涙ゝと思ゝて物ゝりけれい思
ゝゝゝゝ涙ゝひのゝゝす山事を姫君のゝのと君
陸の小の方ゝ君ゝれい姫ゝるゝみゝゝら中将ゝ糸
ゝすゝゝて梅ゝゝ侍る我人ゝゝゝ物方
にてゝしませんなとゝひなて姫君をゝゝ
ゝゝ三重院の海初成ゝ梅ゝ言ゝ物ゝ方い

海のはしに荒うみ不なれいんをしてとものね人
はすなとしひきしこ林源くあらしうちろの山
きもゆりとそつと支なすて大ゆ後の二河りの
ふ弁尼と者それ山物所の陸の浮舟の事岡をへ
ひと目このの母のおより文持りつるいと城とこの人
んとてこの口こわくかしれ物のかけ法いこ家のわ
やしき部よ信れて物しるものといさいはきん
やまとき有よわかりて尼君もかをへと整立て
おわひすのつき日城宮ちて尼君れつるつき幸なと
うちへをしつ光尼君城こ家の前へやりのへわな
つをもつよひる程よ河りのうちより人家
るとて門をこうをすつ弁尼大ゆの山河りと

ゆえて泊こをこう尼君よ野面ちんと右のこをりれい
戸口よ出ね弁尼大ゆのいちこる田をめのとな
とよこをわきけるよ人者安所すとと帰る城
うろく安返しまるつき人なこねいと河こふ
面ひやこのに降程物よ山車のる城人てものね
人お弁びこる契して入へき幸なこい引へよ門さ
してんこうこう人のとこをもいこそよ山こねす
をいすれなと安なこひのこねとこをこ
をやすこひすつ程の口すこすこひか
さしともる藤やしけき東屋のわまり程
ふる面そこまこ引さして
久安まこを生るんこ浮舟の人尼陸を帰るんか

老の名は城のそこ四方へ葺おくる城いとこいひのうれん中うなくていれ物る事月のんの
稚を流り明しのつこそ曉より家の中より姫君城
おのをうちへ渡りの弁尼ハ御供をして中君
へは由城しらせんといつもをして弁この事
に流るとて女房一人のをて おうり ねハ流ハ九月
こりう童へハ内文をして流られうる品きよ佛の
る東城わうねるわるつくうをなうて二
日計籠りおうして流らひるひ月の物ようとな
りうりの之物のうこのしこ通りこ多流
の新乃まうこのし
浮舟 浮舟 中

老の名ハ城浮舟をよるる事より有ること
御文ハ中君の内侍より浮舟の母をおうをて時
ほのに見ます 姫君の内侍城
中君より新内へとり流ら ひよりねもまわ
う城内なれハ人昔しきるもわうん時人きの
為よりねるとと河のといひまきらうし
りて三月一日流るとうちようとうつ 槌
ら城うして中君の内侍城
より内流しとり大弱よりのようと橋四しつて
城文を所のて明てうんとしの弱ハ女君琴のねいけ
しきなれハ明て見ますこの家女房ここうそ
らいひのへハ昔の山里よりまけるの人の姫うるやう

まうて海ぶてすむと学とのすまこのほのかに
遊すし人のうち見し合ちる大弱のうちに遊び
て物なとうまりすすつすもうち学ふかやうの
人を信し意うるかとわやくしけれは内侍文なうの
手につけて業大弱へ釈尊記なる大内記なる人
をうて大弱のうちに西向くゆうられうると学
を見うやうとのすつる内記ちれうまなと海り学え
ての身に下人のやうはは内侍のすつ法すうす
このなのすすう見ちけ見ちけ見ちけ
なうとなん学と学ゆるまうれうくうすは
女をほのうる見うしうとうとうる見宣わうやと物ほし
わすゆん濃うねはは内記ちれ海らひ合をていうう

悪ひすつる法性寺ゆ殿をい事にて支ようはゆるに
ておうねまつ内記殿をゆうつわなはうて
まを入なる人うもねね殿をしん後ちなのひ物の
海ようる見のはは所わのううてて物ねひなとす
る女房三位人ねうる例ちの日ひなる殿枕ひをなの
やはは女房のこほれうるる根なとわてうう
つくうう中天にうくゆけれは二条院ほのの
こしうとうすうるまうるき帳ちうしうれとし
すて人ねうう女天のわとをくうをとう女房
そかうるまはせんやうもなて西ひやのねのうう
をうきするうをつけてうをとうふうて
をなと業大弱のまねをしのけれはうもうき

なるも同じやうにて大なる後と思ひていれなるべき
にてはあらねどもあひてあるべきすうなるべき人な
ほ人ねやうにとわれに所なるもとりやうけるを
常の業の勢に似たる人なるの物まなびのへは
女もいつも海のすがたと思ひけるに
あるべき人なれば海すがたくしひなるべきもんかな
くて明るよ海のやうにて四位の人くもこ
ろ沿りなるすれども沿のすがたなるべん
なるべきはもなんるべきはしねば計無なて大をを
よひのるるは節りのなんを人らねやう
にこのとのへは業大なるのつしむのるて
物忘に節り沿面いひて学の間へ人をもいれて

すてて大なる所に座するけしきなるべきなる人をもて知き物
なりの業のようの内史なるとなるきやうにと石山へ紅なと
をたること大なる所にますますき物を実合て白
えは波のすこと白えるうちよ座なる日海舟の母
石山の業んとして近おこすへく契れるは母の
方へは海舟の月のさとりるを内なるこつけやり
て毛目は座ましくらしつて物きの元をも
我身のへは打鹿きさきまの如海の月よりも
形ようにいなるこひなしと見のつ現しよを
て毛目をしのひ又女のんつくへき物なと我
主のひて影を見さるん物は見を見よして男
女のなひ所みるこの我出つかてわと

やうて

長きよをたのめてもなほ恨ぶべしうわすしらぬ命とけり女筆を見て

ん城ハなけのうらほし命のこゝ宮あなきよと思ひまかは命の宮ゆ計を思ちゝん安きこの人のんゝ弱ゝんゆ城歌くとこゝ梅大弱のうにすゝ知きのつるうゆ城同のつとえいゝね城恨のつこゝゆゝ迎ひのんゆんつかなふまゝうんハ美ゝゝ人ゝよゝらせで京ゝ近てん長きゝよ言ゝんゝをのひ歌ゝ明ゝよゝるゝ又ゝゝまりのつきなゝねハ海のゝゝて

よにゝらすまゝゝかな光ゝを涙ゝ乃

もかきゝらゝつて涙ゝよゝらゝきゝて乃ゝも逢ふつきゝとゝ女ゝ言ゝよ思て

涙城ゝ移なゝき袖ゝよせきこうねていこうゝ城ゝうゝむつき身て移なゝき袖ハひげこ新ゝ

きかん人をゝゝゝわんゝうなゝゝ如ゝしゝを曉乃わらまゝゝて雲深ゝゝ明ゝゝよゝ雲のゝゝ移ゝ

返すゝゝて夜のゝこゝ涙ハ二月ゝ二月ゝ夜

て大弱宮涙ゝ月て之愛ゝゝこのんゝゝなゝ

きれゝのの涙毋城京ゝ移ゝハしのゝんゝて

明りゝゝ京ハけ迎ゝに恋ゝんゝ

くこ院のゝゝをゝて明言ゝ出ゝて又ゝ

せん夜ゝなきゝゝやうて梅しのゝんゝゝなゝのゝ

ハ白ふも新の間より梅てんとのすゝるゆゑ思ひ
ものハ彩なるうらうきまゝ[illegible]と思ひて物思ふ
大殿ハ山ぶのゝ[illegible]を惜るなんと思ひて[illegible]
そのゝ思きねんも[illegible]の梅を御覧しまゝ[illegible]月
頃の梅ハ大殿ハ姫君のゆゑなと思
ものつゝ京ハ深ゆゑ正の方ハ雪降て[illegible]
きゆゑ時ハ[illegible]きの[illegible]ハ雪
白く見ゆるゆゑ[illegible]と見えゆゑ
ハ紫つゝ毎の雪ハ[illegible]なと所集
[illegible]ハ見る[illegible]
て[illegible]思ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]

うち橋の[illegible]
ふさ[illegible]
[illegible]
物と[illegible]
[illegible]
舟の[illegible]
[illegible]
れハ[illegible]
[illegible]
[illegible]

長谷姫の侍女姫の御ふねに御らひ合きて舟を入なる
時は大納の[illegible]まきらの[illegible]一所計
[illegible]ゆりのんいかこめ[illegible]ふこの人めもつまし
[illegible]ハ時方として白玉の四郎人ぬ[illegible]
て河よりをちぬ人の影ばかりいひとゝのへて姫君
ばかりうき抱きて[illegible]
[illegible]ん[illegible]
[illegible]
[illegible]

峯の高汀の氷ゑて遠ゝ[illegible]
とゝすゑ或まとひあり〳〵も[illegible]
しき祝わし[illegible]

三

降乱れ汀る氷る高よりも中高ゑて我
ハけねつき所深く[illegible]て又ものやとりこの[illegible]
りてかれよりゝ[illegible]
るんゝこのゝらねおすきゝ[illegible]
おほつゝのすく[illegible]

多塔る高のゝ[illegible]
にうきくらす[illegible]
ゝ文通ゝしまゝ[illegible]

こ或時白の文字紙の箱へ来る[illegible]の[illegible]文り人有
てわゝ〳〵ゝひ白の[illegible]文の[illegible]小有高[illegible]つけ
てゝ[illegible]ゝうちよりの返し白ゑ[illegible]
るとゝゝ[illegible]文の[illegible]赤きゝしかんゝとと
ゝゝ山田我葉ゝ[illegible]白文[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ通ゝ[illegible]
よと[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝの中ゝ女のゝゝ[illegible]なのゝゝゝ妻なとゝゝ
わゝねゝ深く[illegible]て[illegible]人物ゝゝ[illegible]ゝす女
のけゝきゝみんと[illegible]ゝ[illegible]文を[illegible]
波ゝゝる[illegible]ゝゝす[illegible]の松ゝゝゝゝんとの
ゝゝける[illegible]ゝ[illegible]白ゝ[illegible]

よと物語て四位しまへきさうなりて四又城主の
さうになりて和さこの[illegible]おとて返しまりつて
好文殿よりとものねんなとときひ発て[illegible]
けるよ文通ひしのすきさ叶ものねよ兵庫て[illegible]
ぬれとものねんらみなれいせん方なきに系
より四又さとて右をこのすさの右をよひてわひ
さるうちくわなしいひ[illegible]ひとれと右をもこ有い逢
すすす叶ちといこい時分入て伊達よ逢てうち
うれとてつのすすくして逢てりさまくよ
いと叶まきなれいさくい伊達第て事の松ヶ
といさない所も文好よ好文殿あは四さるとほくを
のるにつらひさる殺して犬のとかもるもとろ

変ける[illegible]て伊達をあて第ろに馬
ほを乗れい時方このくつを伊達よとをて好伊
達ろ変ぬりつて時伊達ろ
ぬらんやうもなき由を[illegible]ぬらひるき取もなけ
れい四このつの松ねの藤の伊達あつを変て出
しぬれいまの四人年四さ松もいを絵しりれい
箱へ[illegible]まさん日伐第て[illegible]しらをのさたこの
りなんと実ぬぬ[illegible]所いうく文好い答もる犬り
変ろも彩よ男たのろ引なるしし犬わやかしなと
いつも深のしりなれい伊達藤舟の長もあの
四[illegible]松伐実て枕ろうく計すて兵乳りう大移い
人ちなれうる和なれい兵ちる和のるもおてるよ

と思ひつゝ彼の間より梅ちもしてんとのゆひいそ
くゑいを先より迎んゆ我いとくきの〳〵い女いとるゆか
くよ又者しきうゑ松なりんと思つゝ外をうしな
もんゆ我思いてきく人のゆうこうねゆにゆうく
くよりのゆなと折よ焼物よ流しなとする我
童〳〵梅ちもん流よ笑もやすると んをしゆよ
よとゝゆ〳〵〳〵女房なとハ思ふ〳〵海丹の母の方よ
り出て笑又ゆ きにんもちも汚なゝねゆなれハ
んゆなきゝて彼のゆなとハひゝもゝうにも家
外ハ羊のわゆゝれをくゝ我ゆうにやうそうきねゝ
きをと云よ河老のわらゝ麦を学ても出門イ
こそ沈むゝれなと美んゆ神くて なえゝる衣

城彰よ押苗てかしのゆ
とみえゝうもゆる乱ハ赤の老ゆしゝなり
物ゆ出ゆゝ彼ハ二月物ゆ

結玲　手四上

老の石ハ〳〵もしらす消し　結玲と云ゆにて付
ゝる河ゝゆ海母の老ゝゆる秋のあゝう
ちの荷りのゝ求渡れ〳〵ゝねハかひなく
て注連ていゝゆ我のゆ彼ハ矣ず出ゆの彼
をゆ又知る古を注注なとそり〳〵系城投ゆる
なんと思よりるものとなゝにハ白よゆも
信しれハゝものゝもしらて、うゆもんくと
計ゝて注蕨りうゆもゆる由白ゆも学ゆて打

麁く拵えつれと武士わすれと思ひて行のくれ
ゆるよと思ひ〳〵ゆるすの拵委敷書て金へき由申せ
て時方武士にて四七のとうこのなりねい大方
のうち拵とも書て海苔ねは拵かこよい方て拵のる
なるいいんも口人なるの書思ふ人不十有又世を綴く
書えてハよるうねるなのハ脱拵のるの申すまつ
うひなるしのけるれてうとなる武車にて人乃
なるこうるけもひよこもて向のあれ武原して焼
てゆう葬礼のさま知ろこの拵と墨人のい武又
うこの人拵人ハ口さと拵ものにしのなるこうも
けるとこ大拵もんりとなく思てうちへこつのう
海りのてう拵四のうんえ拵ハせうこうて

より拵思ひ麁ゆうこう拵れ武思ひ拵れよにまきの
てうせのうる由ハかの武を信したるかと思て
四信ようせうる人ハなきかと四のようきも書由な
れハ拵ハ武んと武ひうる人よと思しける押
苗と白ハいつようこうハ通初のひるると四の
ハ能初のうるのなるんん武信こんハ却て思の
りなんと思て武拵を大牙書えうこけのうひる
れんの拵のひうちかハのうて事ハ書武お
ますて拵すの拵こうこう武来て人んう
うるへなと人四のの
新も又うきのうんをわれなていうれやうう
きの信よ西人ハて思十九日に佛僧表すへき

[illegible]ものを見て海のかなたにあるまつの山は海をへだてしやとのこゝろを京へ近かりしかんよりはるかなるものもあるしかなと思しかの詠りるとて芝浦にあい原あのの城新き餘りのの（ノ張）せわていと思て彼中をこけるに行後城新方にさふらへとのの仰れも浮舟（の中をこけるゆのうりまんと人のあいひを嫌てこのの内舟伝（来らんと宮けれ以まをよかゝんと仰りる波なくてうちの山里の嵐らんようとつ思つ后ゝ（来ゆ見をこの思ゝ思と聞よをくみのゝ人ゝ移後い移れ人のゝ見新くてつくゝと源ゝ人のゝ見ふゝのけろのゝのもの

なけよ恋ちゝ城内渡して
ゝとゝて思ふいとゝゝれす見れ以又ゝ思ゝもし
らす消しのけろふ山のけろふいは情捨のゝ世信
よゝんぼうとふ出之

手習　廿七より廿八の文

此巻を手習とし河四郎ゝ有よて名とすゝ横
川よりける僧都八十餘の母ゝ千程成姉妹の
ゝ河ゝ居ゝ之ひゝの山の禁をのとゝ云ふゝの
ひけるこの山ゝ人の居ゝ初せよ信て海ゝよ大尼云
なら坂の程より牧のゝゝゝも家居ゝ又
ゝゝゝいうち先とゝふゝ初度ゝて中荒りして
横川（つげゝゝゝいゝ山荒りして女ゝ思と思

しけれと母の信心篤く法華経を信仰なりしかはすべきなりとて わきうに二人母
の尼そなたの人のつけるこのさわきうか法師に火をも
きせ河原せんに荷の浮ろへおけるを家の板戸本
のかたに白きあるを見て是をとりてこれい人のねるる
所之狐の変化したるのなと板こ見れとも人よかを
見ずなく髪いたくてうつくしく女房の白綾の衣一
きをかきて夜の寒かるも変て法てねうう
一人の法師にて法華経を山内に居れいおもつて人
の河をとる見ぬいさんとて印を結ひなとしつる足
のものか見知のつるをこそをつらはれ人こ変死
うる人の藤ちうるのと四なとの四へ例の山伏中

にさる人をすつる事いわらし狐こもなとしやと
いひけるに法華経も唱へて見れは法師を考
て見れは狐の姿の人へ法師を法華経の元
しまずおそれは信あらしとおもひて法を
説せんとすれいうつかしけれい河のそもわれ家
に泥を塗りて板戸を開ん者之池
法師の外にて聞さうん法華経をする数さんとする我見つて
法師を抱うをのそて部の内ふかをの人へう法華経を
板を妹の尼そなた河の人へ初せのもて変の告有
先を人の板さんとて尼の人へ板部の変する狐
世変失たる狐の海う事かと思う変も河へて部

庄司の妻と一人の娘と侍の
うちにたれはかと思ひ
行ひようつく女をなんとこの美の
しと思ふ娘の婚事
有昔のゆのりを言す今も山
只有る人を庄司自らけをすくひいれなと
こ引和んとしのを法の人ふらう
と きけれと言うつけて見やと
けるに二日計
有る人の行ちしの
来ての物語よ八重の
御ようものるを山葬礼のつうまつるとて

時ハ流ハねなといて漂舟のまうもて葬送の
まし日の夜只有る山人を妹の
庄司同事して山ね漂ハ山
のる人を誘事るハ人
りれと物を見物
る人やと漂舟を
ちなとをれるを
ていやう昔ハ法師
きの姿をも
と思ふ波を
物てあうを
師ハ

んちなるまゝ世のすゑ思ひにも笑ふかこの
人こそ、この女人をれと同れつゝ家一部てしの拙
物を思ひ欲て皆人ねうけしよ妻子をもなりて古
うしに風烈武川派蕉く学えつゝ指物忘
ろしのうしこのハこしこの思ひも笑すきのこ
めちに思を初ろしな　ひつきかゝも迷ひ
て海ゝんと中京よんつゝくうもなんと思を
しを物こつまくくて人よ分られんようふ
色もはるくひて失よといひてつくくとねうし
我清けば男事て者の許ゝとひて抱くんち
ちを書と学えゝ人の誘のと笑し程より
ん通よりり新ねるよ音て出男ハ消うもねとを

我つひよほいのすもせ新ねると思つゝ
くなんと思しそほのすいうもく笑ねと
ゝ出戻ゝ者の姫と思て言よちくみりり昨
ゝ者の母の秋すゝに者とられんす歳事女思つゝ
し巻すよ扶ゝ我ゝ我ゝ門田の稲刈とて拍
まねひつゝ女人の言うたひひくゝならす言
なと学てはわつまよ有し時のすも思ひられ
りり注ゝ文書の中長新の立もし山里よりふ
かつて松陰鶯く風の言もんゝ神きつゝくと
ゝ行をしすの月時き拍ハ戻て程ゝなとて
んゝ我ちれる板を入ても昔のすゝ思られて

賀茂

我ぬれし袖の涙の川の名きせよしのらみ谷
て誰かこゝやしうちりの川の名我涙の川とあり
老人達月を向ひ合ひ給ふ様子の物語なとする我

姫君はつくゝと聞て

我かくて幾世年を廻るとも誰こゝは知人月
の影と月をのみ見すし山辺を仕
る辺を七八人をなりてこの姫むまこなと京を
明通ひ給ひ歌こゝふとい給ていなとい
こゝ思のゝ辺の苔塔をてをし中将の君
山へ行のゝ身を立て給ふ山陰舟を中将度を合せ給ふ

を姫君守のもとも人を見こんすは陰まゝくを
婦のそこは思ん思ひ給ふ中将君の陰より
山をほのゝ人てをり物こんををして山
より陰をを山ゆをを見て山辺の事を辺を
ゝ歌て中将

あこゝ物ゝ風ゝ魔なを如来記部ゝ結ん
をを書く我姫君を辺ゝ思ひ給ふ
辺の返ゝ

梅植て思乱れ如来記を育く家の
辺を梅植て姫君の山辺かこん我孔雀
ゝ思給ふ文を我陰ゝ八月十日の比小雪
物の音を来ゝ来ゝこゝを書しられと

ひとすれつまなけれいひ泥て沖ちんとしかけ
るの物思の餘りや篭城ゆゑ戻るも
ことなれこれ〳〵之帝れね松風よりてそやされ
て面白うりしよ海りの程よ山風つれ
て笛の音吹元〳〵と之方よりて山戻に初せ
に清ゆり祈りしるを叶て浮舟の美を人付るる
海り中思し姫君を〳〵ものこそひてれと之の
程も已に〳〵見ていなひひれいしひてもいさ
なとす強りぬてつれ〳〵嫁まに浮舟の美恭
城れ初のこと之の様よ幸り又参れ風の音も
音よ思出るるく姫君
ムよハ秋の音を今ね夫御る袖よ涙と乱

るるかて山の御新書今の女一之なやまもすよ
よりてゆしまれハ初りさせるの小ゆ之を
参のるる戻之も初せ清の程なれハよきれ音と
思て清新よ様くひひるて姫君ハ山くしもしも
ていむこと之と之新戻之初せより海て新て清
新を様のれと加ひなし中納なとるとく
いるるる城戻ての新姫〳〵母女一之の山
なやこも平ちうよ様のけれハ清新をいよ〳〵失
之新戻之山帳の内（清新を）て世百のるなと
山物様の戻ようちにて浮舟の美を人付系ら
るる様御り中こを世大納のん通しの
小宰相とい女房実て大納の女を実て歌のるる

城郭うるはしかりしもいまはかりそめのとんぼうなるうら
浦新物語のやうにも思ふる由之性なるねるをいひ
ていと思つて小宰相もいとにらさねこ　ゆもも
ゆねねやの書をきこゆ物のもも書も書らねを
書や書のもも書よりもんも城ようをものよ書ハ書ハ句
ふや書の句ようにもて　清舟
袖ふれし人こそこゝねぬのこれまかと句ふ
書の曙　大ハ清舟のもも新く思しられハ彼
方書のもも城形んと思よそて所をもも仕
別しのもも面目大ハ所書　第のて物語の形
ふうもして女を失ひうる物語のもの中ま
清新の物語の新を新中ものうるといひてハ書ハ
ハ

くいもられんと思て小宰相をすゝめて、いもをのもつて
新書思て世るやもれけんなと云ふよりも和こ文を思ける
り清新書ハいつくと文のもねハ清新る遠て性
物語も問んと思つて月ごとの八日ハ第師佛へ
参りのもるれハ中書よりなりて三月に横川へ
おもむんと思つこのの分の書をあて立すを寺
うもしのと清舟と尺書ても人の中ましま
りて人ふけのされるるなもてハとんをし
なけり小社ものハつれくぬまる思ふる寄ようを
なもつて書ものを出すを
当れ云たいひけるこ
美濃物語　廿八

心老の用ゆ業をしゆ回不如ゆきうれと見いん
まて身うう老の苦を心一切の衆生苦いを苦を弱わて
業の世成住壞と金剛業の海橋と[illegible]一生業
のやうにてゝたる人つこ源氏の夢の城幻の
老ゝまゝまこゝの又業の事を心老ゝて事終ぬ業現と
所しうるを住と大圓覺強よ如知流生ゆ末成
佛生死涅槃如此業なゝもを業の海橋に
人なゝ業と云ゝ業と計いゝれぬ加こ業中
ゝ行時よ敬ゆ事を心城陽て大河城
陽ゝるゆを揚て行ける加よ業の海橋
とゝつるゝゝ又心一切世ゝ始世ゝ流れの
心時ゝこゝゝ業場の河い安樂ゝ海橋城業大

の尋ゝりゆゝもなゝ見業なゝてゝゝゝ不
心世ゝ又心老の苦を法の師ゝもゝゝゝを補
苦煩悩のゝゝ是心苦の老の事ゆ書
つけゝるゝ業大弱ひゝの心よ世ゆひ中業心
海のゆゝ海ゆて主ゝりゆ橋ゝよゝゝゝて
波浪敬に海舟のゆ高ゆゝゝよゝ主ゆけるゆ
なゝんを心文つむつきゝゆゝすゝ心ゝつゝ事
業海て実世ゝりゆゝ海敬のん舟よ大弱なゝと
のんゝゝゆて敬ゆゝ心ゆ海ゆけのゝゆゝしを
心ひゝまゝゝて敬ゆ敬なゝしゝるゝ敬敬ゆゝ
んのゝりゆゆゝりゝゝゝと敬ゆゝ法師ゝけ
なゝ事ゝゝ心ゝね心ゝゝゝれと海舟のゝゝた

るゆゑ、しるべしるべしの人と清新を係のするとあす
ハ第ゝ待る用うちてせゝとゝならんを
好ゝ者ゝまゝとなれハしひて、いとんもうすの
ゝて海らんとしのみゝまゝらハ清新の四文一ゝて
り逝ゝて部とハなゝて思ふる人ゝとゝの
くゝ思ゝん或しらゝの人ゝとして波姫毛の分なる小
毛を引て山事をつのひゝて清んとのみゝれハ
自ら戻ゝなゝし戒ゝ殺なゝらゝつゝ又ゝ
をゝとゝんゝすハ法師の分ゝ罪深き事ゝ
とゝなひゝとゝうゝれと大ゝ清ゝ女を彩ゝ好ゝ多ゝ
んなゝす波毎なる人の好ゝ分ゝらて無ゝ
ハ捨ゝ支改ゝてしらゝんと付ゝ部ハいけなゝき

殺ゝり思ゝんゝて生ゝんすゝゝぬれハ部ゝゝよの屋
の人なゝんの屋ハ部ゝをなゝと殺ゝこハいゝれ
て四文ゝて生ゝ経日ゝ者ゝゝゝれハ小神ハゝき中為
り殺ゝと思ゝなゝらゝけひのゝらんゝハ中
殺ゝと思ゝて殺ゝるゝの屋を部ゝ殺なゝと
ゝて屋ゝき殺ゝて行ゝけゝき或小神
の屋ゝ生見て大殺度の清新の詳ゝ
ゝると字ゝこの走ゝやなゝと人を生者の毛字て
月日の屋殺ゝゝも大殺の部ゝ忘れぬゝゝハこの
ひなきに部なゝ部ゝ清ゝと思て高佛なゝる
ゝゝらゝうゝて殺ゝハ殺毎大殺ハ時
小毛を小野ゝ者ゝて思ゝなゝらゝ人踏ゝけ

れい光海のそば屋より小春と釈愛吳古人
二三人原て出るの小春と人きつのねやうにうも
に姉春のまかを姉ることを支つれりて春よ
母のもまうと実すなとはうあす同ちかう
とし人中のもこのうちと吳はのもしりれいはをうなん
と嫁変も春ちも吳て派の海るをまきらの
なとしりう小春より出て浮船の四文指
て来るの人をとひ人をうりるとなるとよ
ひつれい小春うつくそうそきて入うて
芋を備して居るいら（なとしのりう小文をこれ
八法毋の方とを文こ右後渡のうす春の年
れいのとのまに海を居ます也一日一次の往生

部てもとのうなきくとこそなれなとを
のり小春文のんもとへいりき雑りれいはの
なもいひ略らわのなとをあられて外さ
むきて尺のいは外を拾んとをし
きをうを立と吳はしりちを光毋の
母間をやと吳と姓よ走と世よられしり
んなれいは勢間を寸のこのき秋てきしうを式
笑すといいは文拾こよいをれつ能ん間うと
居を達も吳さんと吳て美の事笑えねうち
に毎一人をしやに吳ふうまう世よ発するや
らんは事計んりをなまを式母も尺りを寸
れとをいは世よをとしらんん母も巡りまて

浦新よりのぼり大和屋なとらしれぬ人事
恨わ爰こ大和の屋のぼりへき人ハ母屋をのぼへ
といひてつれなき、城ひりなくてき恨そてい
毛を浮舟のおとすする水こ入うはひらとも物
こ城恨わしく思て又大和屋より四文有いの
て浦ん と對面つて後さまはしてつかよ
物つ入つと浮舟をき帳のうちへおしよせたう
物こしなんとさけさひ新毛と笑ひ生ましし
大和の四文を浮舟四文をとりてとく海なんと
つさけハ居之文をとりて浮舟ようすれハ
昔人別しハ有りて中やうり人新らもて爰
浦うもせよ浦すき新出なて

法の師と尋ねる法をしるべて思ひ出
よ論遠ハ新浦新の浦を尋る事のうるとと
物て好文の作よ遠ふと云んこの山地の栖を尋
遠ふんふかまきるへき中やうもなく中やうり
出のへとうとしられ生んを遠いんち
かき乳て河事も美ねハ昔の事も思ひてや
うて四遠事もつのまうらん先四文を物て茶
のおこのひうもうん人ようて新入のうて
山毛ハ茶ハ思し姉毛の四なを人手海て大和
に河ととのうきん なと思わきれてなり海ねし
き恨を大和の中に見移西ふるう
ハ人の信し立てるるわやなと物思しなる新

て渡海の時、河とうらうんそその他物
語のとゝみえすゆ十日帳の外ゝ墨丈書再
の表ゝ尋常のゝ事を出さる物語ゝとゝと
も慥なゝす併ゝ物ゝ
白けれ
源氏ゝ雲隠物語
右源ゝ雲隠物二老別帖萬代氏正益承
紙表紙ゝ表不損速也何皆而不遠年出大
家重物源氏雲隠ゝ事ゝ家ゝ歌續源
氏ゝ須ゝ賞山物語了而後續源氏別ゝ物
而獨青ゝ後ゝ其分外ゝ物
天保十一年十一月写之畢
保田光別